



冬号



創作昔ばなし

## すみつかれの話

作・語り部 間中一代  
挿絵・佐々木明

むかし、ある村にお  
稲荷さまの神社があっ  
て、そのそばに、じい  
様と、ばあ様が住んで  
おった。

二月のある晩のこと、  
二人は、囲炉裏にあた  
りながら湯飲んでた。  
そしたら、じい様が、

「おばあさんや、もう  
すぐ初午で、お稲荷さ  
まの祭りだ。今年も豊  
作お願いしなくちゃな  
んねえなあ」

「でも、おじいさん、  
お供える力ワリモノの  
ご馳走ねえぞ」

「そだなあ、おらちには  
大根ぐれえしかねえなあ」

## 民話を楽しく読む



「そんじゃあ、  
村のたいにも声  
かけて、みんな  
してお供えるし  
かねえべ」

そこで、じい  
様は、隣のくさ  
れ根性のじい様  
のところへ行っ  
た。

「じい様、じい様」

「んゝなんだ」

「じい様、初午に、一緒にご馳走作  
んねえがい」

「初午だと、そんなことおらの知っ  
たことか」

というと、ガターンと、戸を閉めて、  
奥へ引っ込んでったと。

「まあ、しょうがねえ、しょうがね  
え、ほかをまわっぺ」

じい様は、村中に声掛けてまわった。



でも、二月の初め（今で言えば3月  
の半ば）のことだ、どこの家も、秋  
にとって埋けておいたものも少なく  
なっておったと。

初午の日、じい様とばあ様がお稲  
荷様に大根持って行って待ってたら、  
村のもんが集まって来た。上の家  
のじい様が、

「おらちには、節分にま  
いた炒り豆がちいっと  
残ってた」

と、炒り豆の



袋ぶら下げて来た。下の

家のばあ様も、

「嫁にやった娘が暮れ  
に持ってきた塩引き  
の頭、だしくらい  
出っぺ」

と、軒先に吊るし  
てあった塩引き  
の頭を持って来  
た。東の家のじ  
い様も、

「ちいっと、しなびってっけど、だ  
いじっだっぺ」

と、にんじん持って来た。西の家の  
ばあ様も、

「お神酒はねえけど、杜氏に行っ  
た息子がみやげに持って来た酒粕な  
らあっと」

と、酒粕持って来た。

「ありがてえ、ありがてえ、こんだ  
けあれば何かできっぺ」

さっそく、みんなでご馳走こしやえ  
にかかったと。

「大根はすが空いてるから煮しめも  
できねえし、豆も、塩引きの頭も固  
い。どうしたらよがっぺなあ」

「みんな、細か

くして、ごった  
煮にするしかね  
えべ」



「そうだ、そうだ」

ということになって、おにおろしっていう竹でできた大きなおろしで大根やにんじんをこりこりこりこりすりおろして、塩引きの頭だのなんだのは細かく切って、大釜でグツグツグツグツグツ煮た。出来上がると、さっそく、お稲荷様にお供えして、よおく、その年の豊作お願いしたんだと。「どれ、おらたちも、よばれっぺ」

とって、出来上がったの食ってみたら、うめえのうまくねえのってほった落っこちるくらいだった。「これが、みんな残りもんで出来てるなんて思えねえな、お稲荷様も喜ぶべ」

「よおく味がしみてつかって」「これ、しみづかりって呼ぶべ」

「そつか、すみづかりかあ」

「んだ、すみづかれだ」

ほれ、みんななまたってっぺな、

しみすかりとか、

すみづかれとか言

いながら食ったと。

大釜に残ったすみ

づかれはみんな分

けて持って帰っ

た。

じいさんとばあさん

が、つぎの日の朝飯に食ってみた。

冷たくなって凍みるくらいだったの

に、出来立ての熱いのよりうめえく

らいだったと。

その後雪は降る、からっ風は吹

くして寒い日が続いたのに、このす

みづかれを食べたもんは風邪ひとつ

引かねえ、寝たきりのばあ様までこ

れ食って元気になったと。秋には米

はどっさりとれるし、畑のもんもた

あんと採れて、これまでにない豊作

だったと。

村のもんは、

「こりゃあ、すみづかれのこ利益



と、喜んだと。

ところが、あのくされ

根性の隣のじい様の家は、

米は採れねえ、つまんね

えところでおっ転がって

怪我するして、この年、

えれえ難儀してたと。

みんな、

「罰があたったんだっぺ」

なんて噂したが、それでも気の毒

がって、食べ物分けてやったりし

たと。

さて、次の年のことだ、また村

のたいが初午にすみづかれ作りに

お稲荷様に集まってたら、隣のじ

い様が来たんだと。

「お稲荷様のお使いの、お狐様も

喜ぶべ」

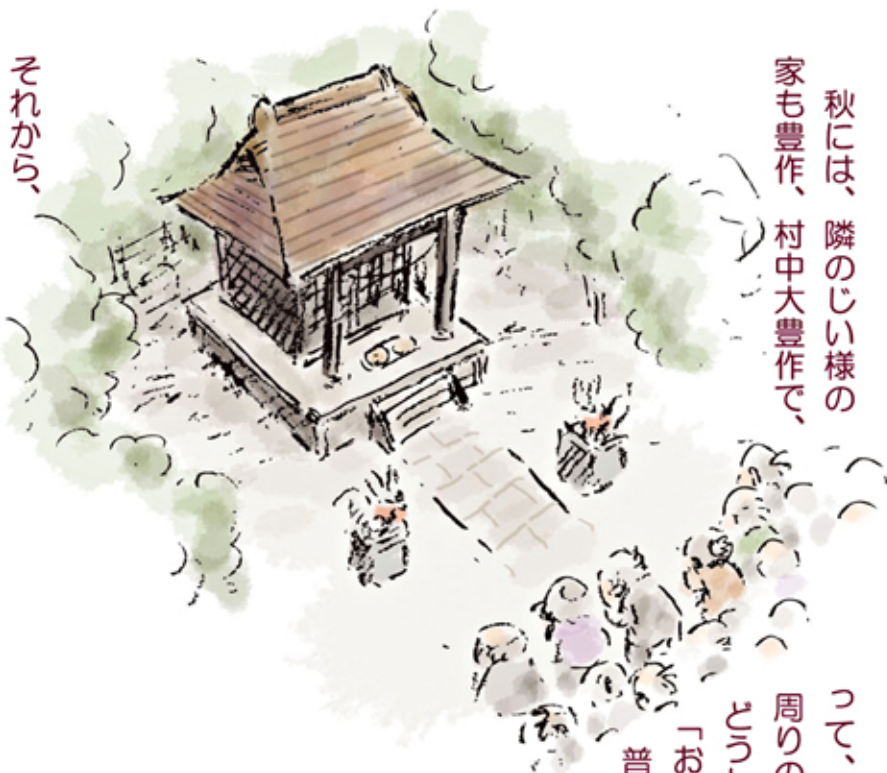
と、油あげを差し出したと。それ

もきさんで入れたら前の年より

もっとうまいすみづかれができた

と。

秋には、隣のじい様の家も豊作、村中大豊作で、



って、正月過ぎに作って食ったら、周りの村はみんな豊作だつづうのに、どうした訳か米一粒も採れねえ。

「お稻荷様にあげるカワリモノを普段に食べた罰があたった」

といって、

「すみつかれは初午より先に作るものではない」

といわれるようになったと。

それから、みんな暮らし向きもよくなって、一軒一軒の家ですみつかれを作るようになった。同じもので作るのに不思議と家ごとに味が違う。

「七軒食べ歩くと中気にならない」

とか、

「すみつかれを食べると疫病にかからない」

とかいう言い伝えもある。

みんな、スミツカシ食べて、元気で達者にくらすべ。

それから、

じい様とはあ様は、

幸せにくらしたということだ。

これが評判になって、あっちの村でも、こっちの村でも作る様になったと。ある時、川向こうの村で、

「こんなうめえもん、初午まで待てねえ」

おしまい。